
誘われて

花浅葱羽羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
誘われて

【コード】
N9140L

【作者名】
花浅葱羽羅

【あらすじ】
ここはどこなのだろう。そう考えることは一分はもちろん、一秒だってなかった。

何かに誘われるように千沙は道を歩いていった。

町のはずれの細い道を通って現れた美しい大きな湖は静かで、鳥をはじめとする生き物が一匹も居なかった。

「凄…」

千沙は操られるように一歩また一歩と湖に近づく。ゆらりともしない湖は、不気味でさえあったが、それ以上に美しかった。水色とか緑色とかを絶妙なバランスで混ぜて作ったようなエメラルドグリーンの湖の水はどこまでも透き通り、その小石をキラキラとさせていた。太陽は少々肌に痛いくらいの光を地上にそそいで、まだほのかに春の香りがした。

ガサツ

急に千沙の背後で音がした。夢の中のようにゆらゆらとしていた脳が覚醒してゆく。

「誰!!!」

千沙は驚いて振り返り、そして思わず目を見開いた。そこに立っていたのは、美しい赤い着物に身を包んだ黒髪黒目の大人にも子供にも見えない少女だった。その少女は一瞬身を構えるようにしてから、すぐにその顔に微笑をこぼした。

「あら？ 道に迷ったのかしら？」

「えっ はい。」

千沙は少々反射的に首を縦に振った。それにしたとしても、ただ誘われるようにこの場に来ただけなのだ。帰り方は分からない。迷子同然だ。

「なら、一刻も早くここから出たほうがいいわ。」

「え？ 何で??」

「この湖は妖怪が精気を吸いに来る場所。今は未の刻で明るく妖怪はあまり居ないけど、酉の刻になればこのあたりは暗くなり、妖怪も集まってくる。そうすれば貴女のような人間は餌にしかならないわ。」

「そんなんっ」

そんなこと、信じられない。と、何時もの千沙なら言うだろうが、この時は違った。先ほどまで静かだった美しい湖から、肌を這い上がるような悪寒を感じた。気のせいかもしれない。だが、そうは思えなかった。

「行きなさい。」

少女が林のほうを指差す。見ると道があった。なぜ気が付かなかったのだろうと千沙は思った。

「あの道を真っ直ぐ行けば貴女の家に着くわ。」

千沙は頷くと無我夢中で走り出した。しかし途中で振り向くと少女に言った。

「ねえ!!! あなたも早く出なくちゃ!!!」

その言葉に、少女は少し目を見開いてから、ゆっくりと言った。

「私は大丈夫よ。」

変わらない微笑、それはまるで仮面のようですらあった。その言葉に千沙は声を張り上げる。

「どうして!!」

「だって私は」

少女の言葉を防ぐように突風が急に吹いた。しかし、千沙は少女の言葉をしっかりと聞いていた。突風が吹き止むと、千沙は自分の家の前に居た。そして少女の言った言葉を思い出し呟いた。

「だって私は妖怪に喰われたのだから。」

(つまり幽霊なのよ。)

千沙は家の前で立ち尽くしたまま、父親が帰ってきて話しかけられるまで少女の言った言葉を呟いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9140/>

誘われて

2010年10月20日19時47分発行